

―銀游回帰―『スクが来た!』

僕は小高い丘を猛ダツシュで駆け上がった。そこには、あの日お爺と見た青い海に漂う銀幕の「生^{せい}」の舞台が開演を待っていた。

僕の記憶は二十年ほど前、お婆が亡くなつた頃にさかのぼる。

「お爺! お婆はどこ行った?」

それなりに大きな声で言ったつもりなのが、海風が僕の声連れて行ってしまったのか、少なくともお爺の心には響いていないようだった。お爺は一向に僕の顔を見ようともしない。いくつもの皺^{しわ}が刻まれ、日焼けをして真っ黒になった自分自身の顔を時折ぐるぐると片手で撫で回している。そして、まるで愁^{うれ}いを払うかのように目を瞬^{しばた}きながら、ただ黙々と二本の釣り竿に糸の仕掛けを施しているだけだった。

「ええ、お爺ってばよ。なんでしゃべらんば

あ！」

僕が声を一層荒げても、お爺の耳はピクリとも動かない。ただ釣り竿の先端をしきりにしならせながら調整をするだけだった。

「意味くじ分からん」

僕は子供ながらの知恵で、サバニの板底を何度も踏み鳴らしながらお爺の反応を見ようとした。けれども、一向にお爺には通じない。

「お爺よ、魂まごい落としたかあ?!」

僕はこうしてむきになってお爺にあれこれと言葉を投げつけていた。これは僕が六歳になる年の晩春のことだった。お爺の名前は

あらかきさくじろう
新垣作次郎

、皆は「サク爺」と呼んでいて、当時

六十五歳になっていた。お婆の名前はキヨ、お爺より五つ年下で、丁度還暦を迎える一か月前に亡くなったことになる。お婆は亡くなる数か月前から本島の病院にずっと入院していた。だから、「ほれ、お婆帰って来たぞ！」と言われても、お婆の亡くなる時の姿も見ていないし、本島で茶毘だびに付され、小さ

な木の箱に入れられて戻って来たお婆が僕には得体のしれない無機質なものしか思えなかった。

キヨ婆の葬儀から一週間が経ち、「ハチナシカ」いわゆる内地での初七日の法要とやらが前夜行われた。それまでの一週間、お爺は何も食べ物を口に入れず、また、誰とも口をきかなかった。ただ浜辺にあるアダンの木の下で、毎日毎日、海の彼方かなたを見つめながら

島酒しまぢけ

を呑み続けているだけだった。

ところが、今朝早く、僕は突然お爺に起こされて、そのままこのサバニに乗せられた。「えー、シーバイしたかったのによ、お爺が無理に舟に乗せるからよ。わーはここからシーバイするからな！」僕はお爺への反抗心と共に、パンパンになっていた膀胱の痛みが限界に来ていたことも重なって、その苦痛を解放するため、なりふり構うことなくサバニの端に立っておしっこをしはじめた。良く晴れた青空の下、僕の体内に生命力を与え終わ

った老廃物が、太陽の光にキラキラと光りながら青い海に向かって放物線を描いていた。命を抜き取られた老廃物が、生き物の母なる海に還^{かえ}ってゆく。当時はそんな高尚なことを考える余地もなかったが、あの日サバニの上でお爺から聞いたことや、島の生活の中で経験したことが、二十六歳になった今の僕には妙に心に染みっていて、少しばかりの人文持^{じんぎんむ}ちにもなっている。そして、「回帰することの不思議さ」が色んな場所や物から見えてくるようになった気もしている。

さて、お爺は竿の調整を終えたようで、ナイフを取り出して、持ってきていた小魚の腹を裂き、切り身をいくつも作っている。

けれども、僕は切り身作りの作業はどうでもよくて、サバニに近寄って来る小魚の群れの方が気になって仕方なかった。お爺に背を向け、反対側のサバニの淵から手を伸ばして海中に指を突っ込む。そして僕の小さな指先をクルクルと回すと小魚が面白い物を見つ

けたかのように寄ってくる。腕白^{うーまくー}な小魚が僕の指をツンツンとつつくので、僕はそれをつまみ上げてやろうとしてバシヤッと音を立てて指先を閉じてみる。すると、キュンと慌てるように海の底へと小魚たちは逃げ帰る。僕にとってはこの海の中にいる小魚との駆け引きが、「青」に見えながら本当は色が無く、どこまでも透明で不思議な鏡を隔てた鬼ごつこのようで、面白くて仕方がなかった。こうして、僕がその鬼ごつこに夢中になっ
ていると、突然、背後からぼそつとした皺^{しわ}枯れ声が僕の体に被^{かぶ}さって来た。
「賢太^{けんた}、ほれ、これ針に付けれ」
今日サバニに乗って初めてお爺が発した言葉だった。僕はその声にピクンと反応しながら振り返り、お爺の姿に目をやった。すると、お爺は右手を差し出して「ホイ、早く受け取れ」と言わんばかりに腕を僕の方に向けて上下に振っている。見ると、腕の先のごつごつとした人差し指と親指に挟まれて、さつき捌^{さば}

いていた小魚の切り身がゆらゆらとぶら下がっている。だけど、僕にとってはその切り身のこともよりも、目の前に差し出されたお爺の手の方に関心が向いている。お爺の指にはこんなにとくさんの切り傷があったのだということや、「人差し指は内側に少し曲がっているて伸びなくなっているんだ」なんてことをあらためて発見したことや、また、「指の一本一本が太くて、僕の指の三倍も四倍もあるよ。うだ」などということを思いながら、ただじつとお爺の指や掌てのひらを見つめていた。

するとお爺が「早く受け取れ」と言わんばかりに顎あごをしゃくりながら僕を促している。僕は、お爺が差し出した魚の切り身と竿を受け取り、釣り針に切り身を丁寧に付けていた。「ポチャン」

少し遠くで軽く弾んだ音がした。僕が釣り針から目を外して後ろを見ると、お爺が先に餌を付け終わって竿を投げていた。穏やかな時の流れの中で、僕もお爺の隣に並んで海に糸

を垂らした。

そういえば、昨年、このサバニを作る時、お爺は何度も指を怪我して血まみれになっていたことを思い出す。痛そうにしかめ面をしながらも、何も言わずに黙々と毎日カンナやノミで木を削り、サバニを創り出していった。その光景は、幼い僕の胸にも熱くこみ上げてくるものがあった。そんなことを回想していると、オレンジ色に微笑む太陽が、僕に魔法をかけはじめ、いつの間にかお爺の腕がどんどん長く伸びてゆき、サバニなのか腕なのか僕にはもう分からなくなっていた。すると、いつしか僕はその腕に包み込まれ、自分の生い立ちなどに思いを巡らせ始めるのだった。

僕にはお父^{とう}の顔もお母^{かあ}の顔も記憶にない。僕が生まれる半年前、突然お父はこの島から居なくなり、僕が生まれて一年後にお母は癌で亡くなったと聞かされている。そんなわけで、親についての僕の想いは海の中で息を吐いた時にブクブクと水中マスクの前を通って

消えてゆく、あのいくつもの泡の中の二粒位にしか思えない。

僕を育ててくれたのはお爺とお婆であり、あとは、ほんのチョッピンだけど、姉ねえねえが僕の尻を叩きながら面倒を見てくれただけだった。姉ねえの名前は「桂かつら」という。何だか不思議な名前だけれど、お爺が竹取物語が好きで、どこから聞いてきたのか、「満月の夜に生まれたからそれがいい」そう言って付けたのだとかお婆は言っていた。幼い頃、僕にはその名付けの流れが全く分からなかった。だけど、高校の古典で「土佐日記」を習った時に、「水底みなぞこ」の月の上より漕ぐ舟の棹にさるは桂なるらし」とかいとう和歌が出てきて、「古代の日本人は、月には桂の木が生えていると信じていたんだぞ」と先生が教えてくれたことで、姉ねえの名前について少しだけ謎が解けた気がした。姉ねえは、僕より五歳年上で、この島では「ウーマクー姫」と呼ばれていた。多分、大和言葉やまとぐちで言うなら「おてんば

姫」とでも言うのだろう。今日も朝早くから、お爺が飼っているヤギの花子はなこにワジワジしていたようで、小屋から姉ねえの大きな声が聞こえていた。

「あれ？」僕はお爺の作った腕の中で、うつらうつらとしていたらしい。太陽の笑顔が強まって、僕はうつすらと滲にじみ始めた額の汗を左の掌で拭ぬぐった。そして、敢えて汗の付いたその掌で、お爺が見ていないうちに、そっと優しくサバニの床を撫でてみた。

この島の周囲の海は透明なはずなのに、青と緑の複雑なグラデーションが太陽の動きと共に時々刻々じりじりと変わってゆく。その光景は島育ちの僕にとっては当たり前のことなのだが、内地人ないちやうにとっては格別のことらしく、この島にやってくる人たちは、皆一様にこの海をひたすら抱きしめたがっているように思っていた。そんな青くも透明に近い、鏡のように凧ないだ海の海面に、サバニがゆらりゆらりと漂いながらしばらく無音の時が続いていた。

「お爺、お婆はどこ行った？」

僕は同じ言葉を、さっきより穏やかな口調でお爺にまた投げた。しかし、それでもやっぱりお爺は返答しない。幼い僕にとっては「人の死」というものが一体何なのか良く分からなかった。その人が物理的に居なくなつてしまふことや、心が悲しくなることは分かるのだが、つい昨日まで隣にいた人の息づかいや温かな肉体が突然消えて、「さて、一体どこに行つてしまつたのだろうか？」と、純粹に考えれば考えるほど、幼い僕には不思議な出来事だと思えなかつたのだ。

「ええ、お爺、人は死んだらどこへ行く？」

子供なりの知恵を働かせたつもりで、僕は少しだけ違う聞き方をしてみた。

「賢太」

ぼそりとお爺が言った。やつと重大な答えが返つて来るのだと思い、僕の体はビクリとして、自然と背筋が伸びていた。

「賢太、やーの竿引いてるさー」

全く違う方向に放たれたお爺の言葉に、緊張は一気に緩み、僕は「ハッシェ、お爺よ！」と口にしながら大いに嘆息たんそくした。なるほど、確かにお爺の言うように、僕の竿はしなり始め、それと同時に僕の体はサバニの外へ外へと引っ張られ始めていた。しかし、僕は島っ子なので、こんなチビでも魚釣りには既に何度も経験していた。だから、それなりに要領は分かっている。それを知っているか、お爺は僕をチラリと見ただけで、あとはなんの手助けもしてくれなかった。

「えーっ、賢太、人生は一人で歩かんとなあ」

お爺はそう言って、青く透き通った鏡を見つめながら、リールを巻くしぐさだけを僕に示した。僕はハツとして、慌ててくるくるとリールを巻き始めながら、鏡の下のまだ見ぬ腕白と闘った。しかし、与えられた棹と針の大きさからしてみれば、大した大物はかかるはずもなく、お爺は結末をちゃんと予測して

いたのであろう。僕がリールをひたすら巻いてゆくと海面に青緑色の背中が現れた。すると、お爺がタモ網を片手に持ってヒョイト、いとも簡単に掬い取ってしまった。網の中では青緑色の獲物が白い腹を見せながら、バタバタと威勢よく暴れている。

「グルクンだ！」僕はお爺と一緒にこの県魚を何度か釣ったことがあったので、直ぐに分かった。だが、かつて初めて釣った時には驚いた。海の中では青緑色の背中が、釣りあげるとすぐにサーッと赤い色に変わってゆく。まるで鮮血を流したような色になってしまったので、幼い僕にとっては恐怖だった。僕は鮮血色のグルクンを見ながらわなわなと震え、

「お爺、魚、一杯血が出ちゃったよ！」

そういうと、お爺は笑いながら、

「これが本物の色さ。グルクンはさっきまで海の中で皆を騙していたわけさ」

お爺の言葉の意味が僕には分からなかった。「なんでよ！」という僕の言葉に、お爺はポ

ツリと聞いた。

「生きる為さ」

「えー！　生きるために騙していいわけ？」

しかし、僕のその疑問への答えをお爺は返してはこなかった。ただ、バケツに海水を掬って釣れたグルクンを針からはずし、そこに投げ込んでまたじっと前を見ているだけだった。

今日もまた、生きるために青かったグルクンを僕は釣り上げてしまったのだ。

グルクンの本当の色は「赤」なのかもしれない。お爺が言うように、沖縄の青い海を泳ぎまわる時、大きな魚や上空から獲物を狙う鳥たちを騙すために、保護色として青緑色の衣をまとうのだろう。興奮したり、海からあげられてしまった時には、一瞬で「赤」に変わってしまった。きつと、それが生を全うして、最後に本当の自分に戻る証なのかもしれない。「この世を生きてゆく中で、本音・本物とは何なのだろうか？」大人になったはずの今で

も、僕にはまだまだそれがよくわからない。
「お婆はよー、この海のずっと先の誰も見え
ん所に行ったわけさ」
突然、お爺が僕の問いに答え返してきた。
あまりに唐突だったので、僕は金縛りにあつ
たようになり、何も言えなかった。
「お爺が九歳になる前だったかねえ。この島
にも戦^{いくさ}がやって来よった。お爺はまだよく分
からんかったけどよ、『アメリカが来るか
らガマに入って黙っておけ！』って言われた
さ。ハツシエ、遠くで大砲の音やら何やら聞
こえて来るさあね。お爺はよ、ガマの中で青
いはずの海が血の色で赤く染まる景色をずつ
と考えていたさ。だけどよ、ガマから出て海
を見た時には大層^{でーじ}驚いた。海はなんも変わっ
ていないわけさ。太陽もちやんと上がってき
たさ。お爺はよ、何だか分からんかったけど
涙が止まらんかったさ。海が青くて良かった
さあ、うん、良かった」

お爺は一呼吸おくと、海の向こうを見つめ

ながらさらに口を開いた。

「世の中みんな、いつかまた戻ってくるさ。
だから、お婆も戻ってくるさ。その想うむいがあ
るからこうして生きれるわけさ」

お爺の朴ぼくとつ訥な言いぶりが、鋭い吹き矢のよ
うに僕の心に刺さって来る。

「太陽は東から上がるのに西に沈んで、また
東から上がるさ。お婆はよ、でーじ遠い、太
陽が上がるニライカナイまで行ったわけさ。
だからまた必かなじ戻って来るわけさ！」

何だか子供だましのようなことを言い出し
たお爺だけれど、幼い僕にはかえってこんな
言い訳の方がホツとする。

「お爺、お婆はいつ戻る！」

僕は、そんなことは起こりもしないと分か
っていたのについ口からスルリと言葉が出て
しまった。

「満月になる日さ」

お爺はためらうことなくきっぱりとそう言
った。思いも寄らないお爺の返答にどう返し

てよいのか僕は分からなかった。

結局、サバニでのお爺とのゆんたく会話の結末は、

果てしない海に漂流させたまま置いてきた。

そして、お爺が三匹、僕が一匹、命を燃やして真赤に染まっているグルクン四匹をバケツに入れて昼過ぎに家に戻ってきた。

「えーッ、何してた！どこまで行ってたわけ？」

家の前で姉ねえが何だか慌てたような口ぶりです。僕とお爺に声をかけてきた。

「なんだわけ？桂、あんたは何を慌ててるわけ？」

お爺の悠長な口ぶりが姉ねえにはかえって腹立たしいようで、口を尖らせながら言葉を返してきた。

「えー！花子がよ、子供生まれそうなのわけよ。さつきからでーじ鳴いてるし」

すると、お爺は何も言わずにすぐさまヤギ小屋に歩いていった。

「姉ねえ、グルクン釣ってきた」

僕は玄関にグルクンの入ったバケツを置く
と、急いでお爺の後からヤギ小屋に入ってい
った。

「賢太、干し草ここに持ってきておけ」

お爺が妙に真剣な顔付きで言うので、いつ
もと違った空気を感じて、言われた通りに干
し草を何度も花子の所に運んでいった。姉ね
えもグルクンを取り敢えず冷蔵庫に入れてヤ
ギ小屋にやって来た。

「花子、今日はずっと苦しそうさ」

姉ねえが花子の頭を撫でようとすると、花
子は鼻をブルブルツと鳴らして嫌がった。

「ええ、また怒ってるさあ」

「桂、今は花子に触るな。気がたってるから
よ。もうすぐ赤ちゃん産まれるさ」

花子はさつきから何だかブルブルと震えな
がらしきりにベイベーと鳴いている。

僕は何をどうしたらいいのか分からず、た
だ小屋の片隅で為す術すべもなく立っていた。
すると、花子は突然暴れ出したかと思うと、

ピタリと静止して後ろ脚を広げて踏ん張りだした。

「花子、もっと踏ん張ってみれ」

お爺は花子の腹を軽くさすりながらそう言った。

それでも花子はただ「べー、べー」と鳴くだけで、そのまま暫く時間が止まったように何事も起こらなかった。

「お爺、花子死んじゃうの？」

僕は、命の誕生の場だと頭では理解しようとしていたが、この状況は生と死の緊張感が綱引きをしているようにしか思えなかったのだ。

「戻って来るさ、何でもみんな。戻って来るさ」

お爺の言葉は海を見つめていた時と同じだった。

「戻る？」

「そうさ、ニライに行った花子の母親あんなが戻って来るさ」

お爺がそう言った時、サワサワと、干し草が微かに揺れて、花子が一步足を前に突き出した。それと同時に花子のお尻の方から子ヤギが顔を出し始めた。それまで手で口を覆うようにして、僕の斜め前で何も言えずに花子を見つめていた姉ねえが、思い余って声を上げた。

「エエ、お爺！」

お爺は「声を出すな！」と言う仕草だけして、黙って姉ねえに手を振った。

僕はこの神秘的な初めての出来事に、自分が夢を見ているのではないかと思い、こっそりと腕を引っ掻いたり、口に指を突っ込んで嚙んでみたりもしたけれど、やっぱりいつもの花子が不思議な世界を繰り広げていることに間違いはなかった。花子の泣き声がさらに大きくなったかと思ったら、ポコンと音がするのように威勢よく、子ヤギが干し草の上に落ちてきた。その時僕は、お爺が「干し草持って来い！」といった意味を初めて知った。

それから少しすると、花子のお尻の方からも
う一匹子ヤギが生まれてきた。何だかどちら
の子ヤギもヌラヌラとした透明の膜に覆われ
ていて、気持ちが悪いと思っていいたら、花子
はすぐさまその二匹にまわりついているヌ
ラヌラを丁寧に舐めながら、全部綺麗にして
いった。僕は、この新しい命が生まれ出て来
る全ての光景を、声を殺してただじっと見つ
めるだけだった。気が付くと、なんだか良く
分からないけど涙がとめどなく流れ出してい
て、服がびしょびしょに濡れていた。

「花子、赤ちゃん産まれて良かったさあ」

姉ねえは、僕の肩をポンと叩き、それだけ
言っただけで小屋の扉を開けて小走りに出て行っ
た。扉の向こうから太陽の光が差し込んで、両手
で涙を拭いていたウーマク―な姉ねえが妙に
キラキラと光って見えた。
ガサガサと音がするので僕は花子の方に
目をやった。すると、花子の足元で子ヤギ達
は生まれて直ぐなのに一生懸命立とうと頑張

っていた。涙で滲んだままの僕の目は、その姿にまた一層涙の海で覆われてしまった。お爺はというと、いつものように淡々と後始末をしながら「生の仲介役」をこなしている。僕は、なんとなくお爺に声をかけたくなくて、小声で「お爺」と言ってみた。すると、お爺は僕の方を向くこともなく、「花子のアンマーが帰ってきたさ」とだけ言っていて、ゆっくり腰を上げて小屋を出て行った。

次の日から、僕は子ヤギの世話を買って出た。花子は生まれてからずっとお爺とお婆が世話してきたので、まるで自分が人間だと思っっているのか、他のヤギとは仲良しにならない。僕は物心ついた時から花子は友達みたいなものだった。そんな花子から生まれてきた子供だから、僕は自分が兄貴にいちゃんに成れたみたいで嬉しかった。生まれてきた子ヤギはオスメスで、僕が名前を付けようと思っていたら、なぜかお爺は既に名前を決めていて、「オス

とメスならケンとメリーに決まってるさー」
と言って笑うだけだった。

「お爺はよ、昔、車がでーじ好きだったわけ
さ。それでよ、なんかそんなコマーシャルが
あってよ、それが憧れだったみたいなわけ
さ」

姉ねえがそんなことを言い出しながら、今
回の命名はお爺に譲ってあげようと僕を説得
してきた。僕は昼間見たお爺の指と、姉ねえ
の言うお爺の人生のハンドルさばきが重なり
合って、「今回はお爺の想いを乗せた人生の
車の助手席に乗ってあげよう」などと密かに
心に決めたのだった。

「ケン、メリー」

僕はこっそりと子ヤギの名前を呟いた。
ケンとメリーはやんちゃな子ヤギで、僕を
見つけると細くてまだしっかきしていない両
足を踏ん張りながら立ち上がり、まるでじゃ
れついてくる子犬のように一生懸命に走り寄
って来る。花子はそんなウーマクーな二匹の

ためにたくさんさんのミルクを毎日吸われながらも目を細めて嬉しそうに見守っている。「この小屋の中がなんだか『生きていること』で充滿している」僕にはそれ以上のことは説明できないけれど、全身でそう感じる日々が過ぎてゆく。

「お爺の言っていたように、花子のアンマーが本当に帰ってきているのかもしれない。だって、花子も本当に嬉しうだから」

単純にこう思えることが、僕にとっては一番実感できる事実だった。

こうして子ヤギの世話は楽しいけれど、その分忙しくもなりながら、いつの間にか時間が過ぎて行き、夏を迎えて島の人々が少しそわそわとし始めた。

「お爺、今年は来てくれるかなあ」

ある晩、隣に住む栄秀^{えいしゅう}さんが島酒を片手にお爺のもとにやって来た。栄秀さんはお爺より十歳ほど年下だけど、元々空手の指導者も^{ぐてい}して、お爺よりも随分頼もしい身体^{ぐてい}の持

ち主だった。そしてなにより、当時、島では一番腕の立つ漁師うみんちゆだと、みんなが信頼している人だった。

「今年こそ来るさ！ 必かなじよ！」

お爺は右の掌をギュツと握り拳こぶしに変えながらそう言った。

旧暦六月から八月の大潮の日、島にはスクがやって来る。その奇跡的な日は、年に一度か二度しか巡ってこない。しかも、天候などによつては一度も姿を見せない年もある。スクはアイゴと呼ばれる魚の稚魚で、生まれたてで、ほんの三センチ前後の小魚のことをそう呼んでいる。スクがやって来る季節が近づくと、島の皆が待ち望み、ソワソワとし始める。その季節になると、毎日誰かが丘の上に立ち、青い海原を監視する。そしてある日、海の彼方に突然銀幕が現れて、スクが群れて漂いながら港をめがけて押し寄せて来るのだ。しかし、港に入り込んでしまつて藻を食べ始めたスクは苦くなつて味が落ちる。だから、

まずはどれだけ早く発見し、どれだけ早く漁に出るかが勝負なのだ。

「去年も、一昨年もスクは来なかったさ。大潮の日に決まったように嵐になったからさ」

栄秀さんが悔しそうな顔をしてそう言った。

「スクはよ、二カ年の間は戻りたくなかったわけさ。だけど、今年は戻りたいって言うてるはずよ。えー、お婆が来るさ。戻って来るさ」

お爺はそう言いながら島酒をグイッと飲み干した。栄秀さんは、そんなお爺の半分頓珍漢

とんちんかん

25

な言葉を聞きながら、それでも笑顔を崩さずに、何度も何度も頷いていた。

それから一週間ほどが立ち、大潮の日がやってきた。丁度栄秀さんが丘に立ち、監視をしている日のことだった。

「来たぞ！スクが来たぞォ」

集落に響き渡るほど大きな声で栄秀さんが叫んでいた。

六歳になる僕にとって、はっきりとした記

憶の中でスクがやって来る日を迎えたのはその日が初めてのことだった。確か、三歳の頃、島中が大騒ぎで、お婆が何やら大層でーじご機嫌で、僕の頭を随分撫で回していた日のことはうっすらと記憶にある。そうそう、その大漁の日にお爺とお婆が珍しく、二人そろってニコニコ顔で納まっている写真が、お婆の位牌がわりに仏壇の前に置かれている。お爺もこの写真が気に入っているようで、人に見られないようにそつとその写真の埃を時々拭いている。僕はそれを何度も見かけて知ってはいるけれど、今でもずっと僕だけの秘密になっている。栄秀さんは大慌てで丘から降りてきて、お爺に何やら声をかけ、そのまま走って出て行った。

「えー、賢太、お前やもバケツ持って後から港に走れ！」

お爺はそう言うと、一目散に港に走って行った。村の漁師うみんちゆ仲間も皆車を出している。僕は初めての経験で、まるで火事か何かが起き

たように島中が慌てふためく様子に浮足立ってオロオロするだけだった。

「えー、賢太、やー何してるば！早く靴履け！」

こんな時の桂姉ねえは頼もしい。てきぱきと僕に指示出しをして、急いで港に連れ出してくれた。

「あのよ、スクは港に入ってくる前に急いで獲らないとダメになるわけさ！港の防波堤の先にバケツとシュノーケル持って走ってゆけ！」

姉ねえが僕に早口で事情を説明する。

「えー、何でだわけ？」

僕は大人たちの慌てぶりがよく分からずおつとりゆったりと姉ねえに聞いてみる。

「えー、賢太よー、理由^{わけ}はどうでもいいからよ、とにかく急げ！後で教えるから！」

これ以上ぐずぐずしていると、きっと姉ねえの怒りが爆発しそうで恐ろしかった。だから僕は港の防波堤を走り始めた。大人たちは小

さなボートを三艘出して、港から少し出た海面に既に集合しているのが僕の目に入る。防波堤を走ると、海風が僕の身体を足早に通り過ぎて行く。これ以上僕が足を速めたら、空中に舞い上がってしまったのではないかと思うほど、僕は全速力で突端を目指して走っていた。

僕は堤防の突端に立ち、青い海に目をやった。近くでは、大人たちが、船と船との間に網を袋状にして準備万端整えている。そして、その先遙か沖合に目を移すと、銀色に光る海面が、まるで風に揺れる大きな幕のように右へ左へと漂いながら、港を目指して前進するのが手に取るようにはつきりと見えてくる。さらに、その銀幕が港に近づくにしたがって、幕の内側から小さな命がピチピチと飛び跳ねて、それが太陽の光で黄金色に輝く姿を僕に見せつける。僕はその光景の衝撃に、さらに太陽と海との魔法が重なって、不思議な空間に引き込まれてしまった。

「どう!? 私たちは母なる大海原から今生まれ、そしてありつたけの命を燃やして君にその姿をさらけ出しているのよ! さあ、私たちの命の輝きをしっかりと見ておきなさい!」そんな怒涛のように激しく力強い命の叫びを、あの白昼夢の中で確かに僕は聞いたのだった。

漁師^{うみんちゆ}

達の声が突然僕の耳に響き渡り、僕は短い間の白昼夢から目の前の現実へと引き戻された。気が付くと、銀幕は既にお爺たちのボートの目の前までやって来ていて、その命の限りをこれでもかと思せつけるように各々が空中に向かって勢いよく飛び跳ねている。

「えー! そっちから追いかけれ!」

お爺が村の若者たちに指示を出す。

若い漁師がボートから手を離し、軽やかに泳ぎながら板などを使って銀幕の広がりやを狭めてゆく。右からも左からも追いつてられた銀幕は身を寄せ合いながらそれでも港をめがけて進んで行く。

「おい、入って来たぞ！」

その声に、皆に一瞬の緊張感が走ってゆくのがよく分かる。その間、僕はまるで孤独な映画館の観客のように、何も出来ずにただその光景を見ているだけだった。

「入ったぞ！ 網を引け！」

今度は栄秀さんが指示をした。

ボートとボートの間に張られた赤い網を次第に狭めてゆく。

「よし、掬え！」

栄秀さんの掛け声と共に、分厚くなった銀幕の中に大きなザルを潜らせて掬い取る。

「えー！ 賢太、そのバケツをこっちに投げれ！」

孤独な観客だった僕にいきなり声がかかったが、僕はただオロオロするしかなかった。すると、お爺が海中から顔を出し、早く投げろと大きく手を振りながら指示をする。僕は取り敢えず銀幕の中央めがけてバケツを投げた。それを見届けた栄秀さんが、両手で大き

く丸を作りニツコリと笑って頷いた。

「えー、賢太、ヤーもそこから飛び込め！」

お爺が僕に向かって叫んでいる。僕は銀幕の戦場の中で何をしていいのか分からず、やけくそで防波堤から海に飛び込んだ。普段から島の子供たちはよく防波堤から飛び込んで遊んでいるので、飛び込むこと自体に抵抗はなかった。ただ、この銀幕の世界の中がどうなっているのか分からない。僕は期待と不安の中でゆっくり大きく目を開けた。透き通った海水の中、無数の命がかたまつて、一斉に右へ左へと泳ぎ回る。網の外に飛び込んだ僕に向かってスクの群れは突進してくる。その命の息吹に圧倒されて僕は海面に浮上した。

「賢太、ボートに上がって海の中にザル突っ込んでスクをいっぱい上げれ！」

お爺が僕に向かって叫んでいる。僕は言われた通りにボートに乗って、ザルを網の中に突っ込み掬い上げた。

「えーっ！ なんねえこれ、でーじ重たいや

し！」

僕は思わず叫んでしまった。幼い僕の背筋力ではこの水揚げはかなりきつい作業だった。

「僅か三センチほどの魚も、群れになったらこんなにも重くなるもんだ」

その日、僕は小さな命を束ねた尊い重さを人生で初めて実感した。

こうして豊穰の祭りは佳境を過ぎて、三艘のボートに積まれたスクが港に水揚げされた。

港では、島のアンマーやお婆たちが拍手喝采で水揚げを迎え入れてくれる。

「今日はスクのから揚げと刺身が食べられるねえ」

港で待っていた桂姉ねえから始まって、どのアンマーもお婆も、皆同じ言葉を口にしている。通常、スクは塩漬けにして瓶詰になっている。それを「スクガラス」と呼び、豆腐の上に乗せて食べたりする。けれども、こうして水揚げした時にだけ、唐揚げや刺身にして食べることが出来るのだ。

「頑張つて漁をした者の特権さあ」と言いながら、漁師うみんちゆは皆誇らしげに称え合い、島酒を酌み交わす。

「やつと戻つてきたさ」

お爺はその言葉を何度も繰り返し、仏壇に置かれている写真をチラリと見ている。その隣で、ゆつくりと島酒を呑んでいる栄秀さんが、今日もお爺の言葉に何度も頷いてくれている。僕はそんな光景を見ながら、少しずつこの島の一員として生きてゆくことがほんのり分かりかけた気がしている。だけど、こうして島人しまんちゆとして大人になってゆくことが、僕には何だかチョッピンむず痒い。今夜は大人たちの宴会が一晩中行われているので、僕は一人で庭に出た。夜空を見上げると、真ん丸お月様が皓皓こうこうと輝いている。「スクが来た！だからお婆が戻つて来たんだね」僕はお爺の言っていた言葉を思い出す。そういえば、「スクはお月様が連れて来てくれるさ」ともお爺は言っていた。姉ねえの名前の由来も含

めて、どうやらお爺は月が好きらしい。ヤギ小屋からは「ベーベー」と花子の鳴く声と、ケンとメリーが「ベツ、ベツ」と短いリズムで泣く声が交互に響き渡っていた。「何だか色々な命に囲まれて、僕は確かに生きている」「そんなことを思いながら僕は部屋に戻り、いつしか眠りについていた。

次の月の大潮の日のことだった。お爺は朝から一人で漁に出た。だけど、夜になっても帰って来なかった。夕方から島の漁師うみんちゆが心配して、総出でお爺の行方を捜してくれた。だけどお爺は見つからなかった。僕も姉ねえも、仏壇の前に座って、お爺とお婆の写真を見つめ、どこにどう祈るでもなく、手を合わせてただずっと泣くことしか出来なかった。夜中近くになって栄秀さんが家に来た。「お爺のサバニが見つかったぞ！」

それを聞いて、僕も姉ねえも裸足で海岸に走って行った。海辺に出ると、満月に照らされたお爺のサバニがただ一艘、鏡の上に浮か

んで何も言わずにじっとしていた。港からはいくつものボートが灯りを照らし、サバニに近づいてゆく。

「お爺、お爺！」

姉ねえは、なぜだか僕のシャツをグイグイと引っ張って、同じ言葉を繰り返しながら泣いている。僕はといえば、得体のしれない恐怖の中で、口が固まり全く声も出せなかった。サバニが港に引き寄せられたけど、結局、

お爺はサバニにも乗っていなかった。

お爺が居なくなつて一週間が過ぎた時のことだった。

「お婆、お爺を連れて行ったのかなあ」

と、突然ポツリと姉ねえが僕に言った。

「ニライカナイ？」

僕は姉ねえにそう答え返した。

「分からんさ。でも、お爺が言ってたからそうなのかもしれんね」

姉ねえは首を傾^{かし}げながらそう言った。

「だったら、またお爺とお婆はきつと一緒に

戻って来るさ！」

何の確信もないけれど、僕は何だかそんな気がして姉ねえに言ってみた。

姉ねえは、その後何も言わずに庭に出て行き泣いていた。

数か月の間、お爺の行方は各方面で搜索された。それでもやっぱりお爺は見つからなかった。僕と姉ねえは、本島に居るお爺のすぐ下の弟にあたる夫婦が面倒を見てくれることになり、この島を離れた。それから二十年の月日が流れていった。姉ねえは高校を出て、那覇で看護師になり、結婚して今は二児の母親として幸せに暮らしている。僕は本島に住みながら大学まで進学させてもらって無事卒業も出来た。そして、東京にある大手の商社にすんなりと入社が決まり、今は東京暮らしもおよそ三年が過ぎた。昨年、大学時代から付き合っていたサークルの後輩と結婚し、彼女はもうすぐ妊娠九カ月が過ぎ、これから後一か月のうちには僕らには子供が授かること

になつてゐる。新しい命が僕の目の前に姿を現す。僕があゝの島でぶちあたつた「生と死」という不思議な世界に出会うのだ。

大学に行くまでは、僕は墓参りも兼ねて本島から度々島にも戻つて来ていたのだが、東京に行つてからこの三年間、島には随分ご無沙汰をしてしまつていた。お爺と住んでいたあの家は、今はお爺の一番下の弟夫婦が住んでいて、墓守もしてくれている。沖縄では長男が墓守をするけれど、長男のお爺が居なくなつてしまつたから少し変わった墓守の流れになつてゐる。今日は那覇への出張がてら、僕は有休をとつて島に足を延ばすことが出来ることになつた。飛行機とフェリーを乗り継いで、こうして島に帰つて来た。

「あれ、賢太、帰つて来たんかい」

フェリーから降りると、かつて隣に住んでいて、随分お世話になつた栄秀さんが僕を見つけて声をかけてくれた。もうすっかりお爺になつた栄秀さんだけど、まだまだ元気そう

で懐かしい。

船着き場に船が付くと、島人の誰かがまともて軽トラックで荷物を受け取りに来てくれる。そしてその後、各家に配達してくれることになっていなのだ。島で生きてゆくにはこうした助け合いが無くてはやってゆけない。ありがたいことに、今日の集荷係はたまたま栄秀さんだったというわけだ。

「賢太、お前の荷物も荷台に乗せて、助手席に乗ってゆけ。送って行くさ」

「はい、ありがとうございます」

僕は運よく栄秀さんに出逢ったので、フェリーの船着き場から実家まで、歩けば二十分ほどの時間を短縮させてもらった。

「そういえば、今日は大潮だし、スクがやって来るかもしれんさね」

なんて偶然のことだろう、僕は栄秀さんのその言葉に、二十年前のあの日の記憶が蘇った。実家に着いて軽く挨拶をすると、居ても立ってもいられずに、僕は丘へと続く一本道

を足早に歩いて行った。そういえば、僕は丘の上からスクが来る様子をまだ見たことが無かった。奇跡のような今日の巡り合わせに心が躍る。

「もし、今日、スクが来たら、きっとお爺とお婆と一緒に戻って来たのだと信じよう」

僕は勝手にそう決めつけて歩を進めていた。

その時だった、僕の耳には疑いもなく奇跡の音が聞こえて来た。

「おい、スクが来たぞ！」

響き渡るその声は丘の上からだった。

僕は思わず小高い丘を猛ダッシュで駆け上

がった。息が上がり、思い切り空気を吸い込

むと、「草いきれ」と「潮しおの香かおり」が渦巻いて、

僕はいつしかいくつもの生せいが織り成す「ない

交ぜの小宇宙」へと組み込まれていった。遠

く水平線の彼方に目を向ける。すると、青い

海を覆うように銀幕のベールが右へ左へと漂

いながら、港をめがけて進んでくる。そして、

そのたなびく銀幕は、太陽の光に反射して、

キラリキラリと時折黄金色にひるがえる。そこに

は、あの日と同じ光景が広がっていた。

「お爺！ お婆はどこ行った？」

僕がまだ幼かったあの日、サバニに乗りながら、何度もお爺に投げかけたその答えを、お爺は僕に伝えるために帰って来たのだと僕は思った。

人は生まれてそして死んでゆく、いや、生きとし生けるこの地上の全ての物はその循環を繰り返す。だけど、きっと何かの形で心に蘇り、また種を植えて去ってゆくのだろう。お爺が言っていた「ニライカナイ」もどこにあるのか分からない。だけどそんな世界があると信じて、お爺もお婆も僕の心に戻って来たと思いたい。きっと来月生まれてくる僕らの子供は、お爺とお婆の種を持って生まれてくるのだろう。

眼下に見える銀幕が、青い海の上で一層元気に踊り出している。どこからともなく銀幕の命が生まれ、そしてまた帰って来た。これ

から僕は、心の中のお爺とお婆を連れて、
年この島を往還しよう。心に決めた。

（完）